



三条駅に今も残るランプ小屋（車内灯・信号灯などに使用する油を保管するための煉瓦製油庫。明治31年の三条駅開業当時からのもの）

出郷—東京高等師範学校に入学

明治三十七年（一九〇四）四月十二日、諸橋は二十二歳で東京高等師範学校国語漢文科に入学すべく、下田村を後にした。村では初めての東京への遊学生ということもあって、村の主だった人たちは袴を着けて村はずれまで見送った。三条までは五十嵐川を約二十キロ舟で下り、午前七時四十分の汽車に乗った。

JR三条駅ホームに今も残るランプ小屋は、明治三十一年（一八九八）の駅開業当時からあるもので、諸橋を見送った生き証人ともいえよう。汽車は長岡、柏崎、直江津を経由して長野県に入り、上田駅に着いたときには午後四時を過ぎていた。その日は上田に宿をとったが、宿に着くと目まいがした。地震かと思っ

て宿の人に聞くと、それは長い汽車の旅で揺られたためでしょうと笑われた。翌日、東京に向かい、市ヶ谷の建部遯吾^{なげべとんご}宅^{（上）}に落ち着いた。諸橋の父安平は建部の父為吉の弟であり、建部遯吾と諸橋轍次は従兄同士ということになる。当時、建部は三十四歳。東京帝国大学社会学講座の初代担当教授の地位にあった。その頃の建部は谷干城^{（2）}の長女芳子と結婚して



東京高等師範学校（大塚窪町）

いたので、谷の屋敷の敷地内の、それでもかなり大きな家に住んでいた。建部はしきりに、漢学をやるなら桂湖村（↓余滴②）について学べと言った。

一週間ばかりの滞在の間に、建部に連れられて谷の孫である儀一と三人で小金井の桜見物に出かけたりしたが、その後はお茶の水の寄宿舎に入った。当時の寄宿舎は、湯島聖堂に隣接した現在の東京医科歯科大学のあるところで、女子高等師範学校（お茶の水女子大学の前身）にも隣接していた。東京高等師範学校は、諸橋が入学した前年に小石川区大塚窪町（現在の東京都文京区大塚）に移転しており、寄宿舎だけがお茶の水にあった。日本人初のオリンピック選手となる金栗四三（明治四十三年入学）は、お茶の水の

寄宿舎から大塚の校舎までの約四キロを毎日二十分走って通ったというが、諸橋は約一時間以上かけて歩いた。

校長は講道館柔道創始者、嘉納治五郎であった。嘉納は、明治二十六年（一八九三）から通算二十五年にわたって東京高等師範学校および附属中学校の校長を務めたほか、明治四十五年（一九一二）七月、日本初参加となるストックホルムでのオリンピック大会に団長として参加したことも知られる。文部省と度々衝突してその都度罷免されるも、結局嘉納が最適任ということになって再任され、諸橋が入学したときは三度目の校長のときだった。「式日に文部大臣がやって来て



嘉納治五郎

も、平気な顔で頭なんかほとんど下げない」（『諸橋轍次著作集』第二卷月報）嘉納だったが、嘉納の功績は、真の教育者養成を目指して、当時百人にも満たなかった生徒のために教授陣には帝国大学に匹敵する人材をそろえることに力を惜しまなかったことだった。夏目漱石も明治二十六年に二十七歳で英語の教師となった。このときのエピソードを『私の個人主義』のなかで、「嘉納さんに始めて会った時も、さうあなただの様に教育者として学生の模範になれといふやうな注文だと、私にはとても勤まりかねるからと逡巡した位でした。嘉納さんは上手な人ですから、否さう正直に断わられると、私は益貴方ますますに来て頂きたくなつてと云って、私を離さなかつたのです。」と書いている。もつとも、夏目は「当時の私はまあ肴屋が菓子屋へ手伝ひに行つたやうなものでした。」と言つて一年後に愛媛の松山中学校（現在の愛媛県立松山高等学校）に赴任してしまう。（『漱石全集』第二十一卷）

そのほかの教授陣には、国文には、現在の新潟県佐渡市出身で諸橋の保証人になった萩野由之と、学級担任となった松井簡治がいた。松井は、富山房との間で本格的に『大日本国語辞典』の編纂事業を始めようとしていたときであった。漢文には、那珂通世のほかに、宇野哲人、鈴木虎雄（↓余滴②）などの若い教師もいたが、すぐに宇野は東京帝国大学文科大学（文学部）へ、鈴木は創設間もない京都帝国大学文科大学に赴任していった。当時、東京・京都両帝国大学の教員に欠員が生じたときには、第一高等学校（旧制一高）か東京高等師範学校の教員から選

ばれるというのが慣例になっていたのは、真の教育者養成を目指して人材を発掘してきた嘉納の面目躍如たるものがあつたと言えよう。嘉納が諸橋に作らせたと言われる東京高等師範学校の教育綱領のなかに「教育の事、天下これより楽しきは無し。英才を陶鑄（注…人材を育成する）して兼ねて天下を善くす。其の身亡ぶと雖も、余薫永く存す」とあるが、それは嘉納自らが実践したことでもあつた。

那珂通世は、『元朝秘史』を邦訳して『成吉思汗實録』（一九〇七年）の書名で出版したことで知られる。漢訳に飽き足らず、モンゴル語によって成吉思汗の研究をしようとしたが、当時、モンゴル語の辞書はドイツ語とロシア語で書かれたものしか無かつたため、那珂は独学でドイツ語とロシア語を修得したのち、モンゴル語による『元朝秘史』を解読、邦訳した。諸橋が入学したころはモンゴル語を学んでいたときで、邦訳も最終段階に入っていた。

(1) 建部遯吾（一八七一—一九四五）新潟県神原郡横越村の生まれ。号は水城。東京帝国大学文科哲学科卒。文学博士。日本における最初の国際的な社会学者として一時代を築いた。一九〇五年、東京帝国大学の六博士とともに「日露条約批准拒否」の上奏文を明治天皇に奉呈、松本清張の『小説東京帝国大学』は、この間の経緯を題材にしている。

(2) 谷干城（一八三七—一九一一）土佐藩出身の軍人・政治家で、貴族院議員・第二代学習院院長でもあつた。戊辰戦争・西南戦争で名を挙げたが、日露開戦に反対し、主戦論者だつた娘婿の建部遯吾と対立した。日露戦後に建部と谷の娘芳子は離婚している。